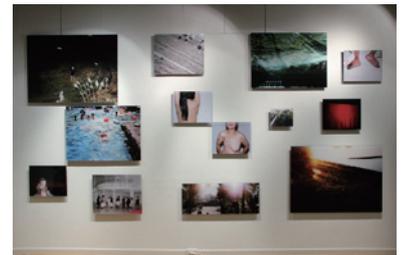


“自分には撮れない写真”と言わしめた作品が決選投票の末にグランプリ!

写真を撮ることは何かを信仰する行為に似ていると話す熊谷さん。ときに笑いを誘うほどのユーモラスな言葉選びと、不器用なまでにストレートな熱情が、断片的なイメージに未知の深みを感じさせ、審査員たちの心を捉えました。

受賞作 「贅沢」

「私たちは自分のみたいものしか見ていないだろう。写真でシャッターを押すというのは、その断定をさらに強くする。しかし、あらゆる事柄は想像の余地を孕んでいる。デジタルからフィルムに記録媒体を変えたことにより、想像するためのワンクッションができた。何かがすぐに現前するのではなく、想像を介することにより、現前するものも変わってくるのではないだろうか。強い断定のメディアで、断定ではない余白を表現したかった」



審査員コメント

小林紀晴

「彼はまだ言葉にできないものを撮りたいのかもしれない。見た瞬間、僕にはこれは撮れないなと思って、そういう意味ではすごく魅力的。可能性と真逆を同時に感じさせる人だと思う。選ぶ立場としてもすごく面白い大きな賭け」

光田ゆり

「本人の話し方と写真から受けるインパクトが近い。応募者の多くは静かな日常を淡々とデリケートな感覚で撮っているが、彼は淡々としていなかった。がむしゃらで切羽詰まった感じ、前進力がある。その強さが魅力だと思う」

姫野希美

「可能性をすごく感じる人。意味や名前から離れて、流れていく何かがあって、握りしめたいものがある。言葉がまだ気持ちに追いついていないのだろうとは思いますが、やろうとしている方向性には何か響いてくるものがある」

秋山伸

「ひとつひとつの写真に迫力があり、また、話が一番面白かった。自分とその過去、あるいは身のまわりの人たちとの関係性を、写真を使って築いていくという所に立脚しながら、写真を完全には信用していないところが面白い。その自由さにおいて、次の展示を見てみたいという気にさせる」

鈴木理策

「撮りたいという写真家の欲求と、実際にその作品を見る人の気持ちには距離がある。撮っている時のテンションだけであるとか、最終的に出来上がったもののクオリティとか、そういう“部分”だけでも写真表現は成立するが、彼は全部をコントロールしたい、全部に意見をしたいのだろうという印象を受けた」



熊谷勇樹 Yuki Kumagai

1988年生まれ。玉川大学在学中。(グランプリ受賞時)



FINALISTS ※五十音順

小山田邦哉
鬼頭志帆
熊谷勇樹
小池裕也
齋藤圭芸
真鍋奈央

JUDGES ※五十音順、敬称略

秋山伸 (グラフィックデザイナー・パブリッシャー)
小林紀晴 (写真家・作家)
鈴木理策 (写真家)
姫野希美 (赤々舎代表取締役・ディレクター)
光田ゆり (美術評論家)

■ 出品者のプレゼンテーションと質疑応答の概略



1 小山田邦哉 Kuniya Oyamada
「displacement」

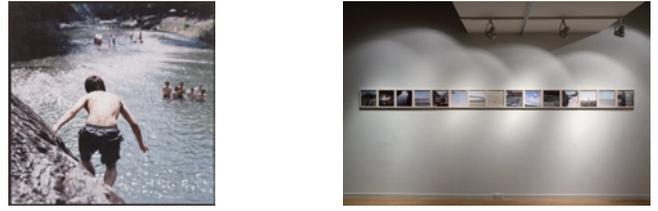


震災後、青森の家の窓から外を見たとき、いつもの風景が違って見える体験をした。今回、素材や次元に違和感をおぼえることで、写真そのものの存在が強く認識されるような作品にした。この不思議な窓が、見る人にとって世界と交信するきっかけになればと思う。

- 〈質疑応答〉
- 鈴木：この作品は見る人がどう感じてくれたら、あなたにとって成功なの？
 - 小山田：見る人によって様々な捉えてもらえれば……。
 - 小林：プレゼンテーションや個展プランを聞いて違和感を覚えた。写真を使って自分の切実な思いを表現しているのか？ それとも頭の中の空想やイメージを表現しているのか？
 - 小山田：いつもは写真に自分の感情を出さないようにしているが、今回は結果的に出てしまった。



2 小池裕也 Yuya Koike
「out line」



写真のデジタル表現とアナログ表現の明らかな差を縮めようと試みたのが今回の作品。紙ネガを使って目の前にある風景を記憶の中の景色に変換しようと思って撮った写真。結果的に意図した変換ではなく、曖昧な記憶を一枚の鮮明な記憶へと変換する作業になった。

- 〈質疑応答〉
- 姫野：ポートフォリオには変換前と変換後の写真があるのに、なぜ変換後だけ展示したの？
 - 小池：ポートフォリオは説明的過ぎた。展示では見る人にもっと考えてほしいと思った。
 - 秋山：フライヤーに載った写真が象徴的だと思うが、なぜ展示作品に入れなかったの？
 - 小池：自分にとって大事な写真だが、この一枚の存在が大きくなり過ぎるのを避けた。



3 熊谷勇樹 Yuki Kumagai
「贅沢」

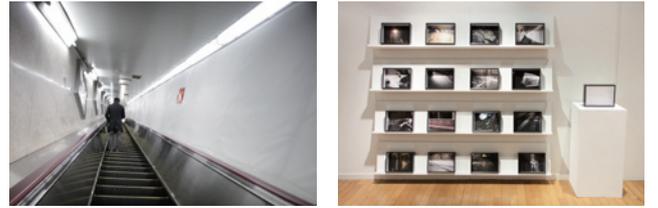


母を亡くした時に骨を食べた。不思議なことに存在しないはずの母を感じた。写真に対してもそれと同じ感覚がある。見る、ということに疑ってほしい。写真を見ているんなら思いを巡らせてほしい。そう思って撮った。好きに想像できる贅沢な作品にしたいと思った。

- 〈質疑応答〉
- 秋山：見ることを疑ってほしいと言ったが、自分の写真をどれくらい信じているの？
 - 熊谷：不確かな部分はあ。だけど、何か引っ掛かるものは写っていると思う。
 - 光田：限られたスペースに展示する場合、今言った「贅沢」というテーマは完結するの？
 - 熊谷：写真を撮る、という根本的な部分では変わらないと思う。
 - 小林：写真を撮ることはあなたにとって、どのくらい切実なものなのか？
 - 熊谷：お金をかけ、時間をかけ、それだけの労力を費やす価値がある根源的な欲求。



4 齋藤圭芸 Tamaki Saito
「幻肢痛」

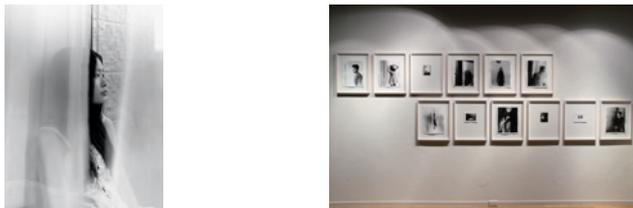


切断され失われた四肢に痛みを感じることを「幻肢痛」という。不安や孤独は幻肢痛と似て、失われた部分が痛むのに、触れることも薬で治すこともできない。しかし自分の外側の世界を見ると、痛みがやわらぐことを発見した。その感覚を写真に撮りたいと思った。

- 〈質疑応答〉
- 秋山：展示に使った棚や作品を装飾している箱はどうやって作ったの？
 - 齋藤：棚は事務局に借りたもので、箱は既製品を使用した。
 - 菅沼：展示してみて、自分で上手くいったと感じる部分は？
 - 齋藤：作品の数やバランスはよかったが、近くで見ると手作りの部分が安っぽくみえるかも。



5 鬼頭志帆 Shiho Kito
「WALLS」



5年ほどイギリスとインドで写真の勉強をした。出会いと別れをくり返した5年間で、文化の違いなど「壁」を感じることもあった。その壁を、写真を通して深く探ってみようと撮り続けた。4×5のカメラを持って対象となる人のいる場所に向かい自然光で撮った作品。

- 〈質疑応答〉
- 鈴木：写真を標本のように「物」として展示すると撮影者のまなざしが見えにくい？
 - 鬼頭：自分の立ち位置はあまり重視しない。撮影したその瞬間があったことを残したい。
 - 小林：展示の中にベタ焼の小さな写真があるが、どういう意図なのか？
 - 鬼頭：サイズが違うことで、見る人に近づいたり離れたりして作品を見てもらいたい。
 - 姫野：撮影のプロセスでは、被写体となる相手と話をしたりするの？
 - 鬼頭：その人が自然体でいてくれるようお願いし、自然光の中で撮影する。



6 真鍋奈央 Nao Manabe
「眼をあけて夢をみる」



眼をあけて夢をみる。私が10歳の夏休み最後の夜に父が突然亡くなった。今でも悲しい時、皆の輪の中にいる時、どこか夢の中の出来事のような。しかし写真始めて、暗い気持ちで撮った写真の中に、かすかな光がみえた。写真を撮ることでやっと世界が面白くなってきた。

- 〈質疑応答〉
- 秋山：個展プランで写真では表せないことをやりたいと言ったが、なぜ今、写真を撮るの？
 - 真鍋：写真を撮っていると、その瞬間の世界の表情がみえる。だから写真で表している。
 - 小林：個展プランと今回の展示とはどうリンクしているの？
 - 真鍋：今回は故郷の四国で撮影した作品ばかり。個展ではそれに東京で撮影した作品を加えたい。
 - 光田：撮影に対する姿勢が素晴らしい。自分の写真を他人に見せることをどう思っているの？
 - 真鍋：写真に自分の暗さや気持ちは入れないようにしている。押しつけがましくしたくない。

■審査員の感想

出品者のプレゼンテーションが終わり、ここからガーディアン・ガーデンの菅沼が進行して各審査員に全体的な感想を聞く。小林さん：「震災後2度目の公募になったが、全体的に低調で元気がなかったように思う。展示したファイナリストの6人は完成された作品ばかりで、難しい審査になりそう」。光田さん：「プレゼンテーションを聞いて、皆さんすごく率直で、しかも深い話だった。写真を撮って作品をつくるというのは、その人の人生そのものという印象を受けた」。鈴木さん：「良かれ悪しかれ、写真で自分の気持ちのテンションをキープするような自己セラピー的な作品が多かった。でも、それでは見る人と思いを共有できないのではないか」。秋山さん：「ポートフォリオを見たり、作家と直接話したりして、作家自身の過去の出来事と関連深い作品だと思った。作品の評価には入らないが、聞いた以上、何らかの影響はあるのでは」。姫野さん：「一次審査の時は閉塞感をすごく感じたが、今回のプレゼンテーションを聞いて、作品づくりに対するエネルギーが伝わってきた。それはとても大事なこと」。



ここでファイナリスト一人一人についての感想を聞いた。まず、●小山田さんの作品について。鈴木さん：「展示も個展プランも“肝心なものを見せない」というコンセプトは面白かった。ただ、プレゼンテーションでは余計なことをしゃべり過ぎていた」。光田さん：「逆説的に写真の窓のまわりがフェイクっぽく見えたのも面白かった」。秋山さん：「非常にコンセプト的な作品づくりの印象を受けた。考え方がしっかりしていて、写真というメディアに対して非常にクール」。小林さん：「写真のプロセスとして最初にコンセプトがあるのは分かった。次に自分のどんな感情から撮影したくなるのが分かりづらかった」。●小池さんの作品について。姫野さん：「展示に入れなかった写真こそ大事なものの。自分の中で整理し過ぎた。整理されないものも大事にするべき」。小林さん：「ポートフォリオと展示にギャップがあり残念だった。考え過ぎだと思う。自分の中で完結しているが見る人には分からない」。光田さん：「大事なものは捨てない方がいい。ポートフォリオにある変換前と変換後を並べて展示することは、説明的ではなく“対比”なので良いと思う」。鈴木さん：「言葉選びが良くなかった。最終的にポートフォリオの見せ方は展示に残すべきだった」。●熊谷さんの作品について。姫野さん：「ポートフォリオを見た時に可能性を感じた。展示作品でやろうとしていることは分かるが手応えを感じにくかった」。秋山さん：「話が一番面白かった。自分の過去や見たものとの関係性を構築していくところに立脚しているが、何かやってくれそう。次

の展示を見てみたい」。鈴木さん：「作品を見る人を全部自分でコントロールしたいという気持ちを感じた。言葉の選び方ももっと考えるといい」。光田さん：「作家本人の話し方と写真から受ける印象が一致した。プレゼンテーションは説得力があったが、展示は少し弱かった」。小林さん：「この人は、きつと言葉にできない何かを撮りたいのでは。この写真は自分には撮れない写真。可能性もその逆も感じさせる」。●齋藤さんの作品について。光田さん：「これまでの作品はどれもすごく実力派。今回の写真は犯罪を思わせる独特さで、展示方法も良かった」。秋山さん：「好きな展示だが、棚も箱もすべて手作りにしたほうが良かった。ポートフォリオの中には1点の駄作もなく、力のある人」。姫野さん：「最初に見た時から良い写真だと思った。突き抜けていく何かを感じた。箱の中に入り込んでいく力と、そこから先に行く力を感じた」。鈴木さん：「すごく緻密に計算しているようで、そこに収まらないチープさもある。いい意味で変な人」。●鬼頭さんの作品について。秋山さん：「写真も展示もソツなく上手くまとめている。でも、もう少しハミ出していいと思った」。光田さん：「どの被写体も速い存在に見える。“壁”というテーマに結び付いている作品だが、この表現でなくちゃいけない部分も見たかった」。鈴木さん：「距離のある写真。でも面白い作品。作業的にはもっと量が必要だ」。小林さん：「最初に写真を見た時、全く知らない人を撮ったのではと思った。写真とは“鏡の法則”。実は作者本人が相手に対して壁をつくっているのでは？」。●真鍋さんの作品について。姫野さん：「相手とやりとりするエネルギーを感じる。信頼感が伝わってくる」。小林さん：「好きな作品。写真と自分との距離の近さがすごく伝わってきた」。秋山さん：「写真はあまり好きでなかったけれど、展示が良かった。装飾してある蔓の留め方が良かった」。光田さん：「山に入って蔓を探ってくるなんて、ファイトがあるところが好き。プレゼンテーションの言葉も良かった」。鈴木さん：「写真の善し悪しに囚われずに、出来上がった写真をすごく本人が見つけている。力のある人だと思う」。



ん：「写真はあまり好きでなかったけれど、展示が良かった。装飾してある蔓の留め方が良かった」。光田さん：「山に入って蔓を探ってくるなんて、ファイトがあるところが好き。プレゼンテーションの言葉も良かった」。鈴木さん：「写真の善し悪しに囚われずに、出来上がった写真をすごく本人が見つけている。力のある人だと思う」。

■審査員による投票

作家一人一人に対する感想を聞いた後で各審査員にグランプリ候補を3名ずつ選んでもらった。結果は……

秋山/熊谷 齋藤 真鍋
小林/熊谷 鬼頭 真鍋
鈴木/齋藤 鬼頭 真鍋
姫野/熊谷 齋藤 真鍋
光田/熊谷 齋藤 真鍋

票を集計すると、
真鍋5票/熊谷4票/齋藤4票/鬼頭2票

菅沼の進行で、5票の真鍋さん、4票の熊谷さん、齋藤さんの3名に絞って議論することになった。まず、熊谷さんについて。秋山さんが「1点1点の写真に迫力があった。ポートフォリオの中に駄作が少なく、しっかりトレーニングしている」と言い、光田さんは「淡々と撮るのではなく、エネルギー感などが魅力」と推す。次に齋藤さんについて。姫野さんが「わかりやすい写真ではないが奥に入って行きながら、そこから先に行く強いエネルギーがある」と言えば、鈴木さんは「緻密に計算されていそうで、又けている部分もある。写真と展示のバランスが良い」と褒める。最後に真鍋さんについて。光田さんが「この人は迷いがなく、自分の道が定まっている気がする」と評価し、秋山さんが「話を聞いてみて、ポンと書けている部分が見えた」と印象を述べた。



ここで、秋山さんから一年後の個展プランを聞きたいという提案があり、一人1分ずつ個展プランを発表。3人のスピーチを聞いた後で、あらためて各審査員に1位票を挙げてもらうことになった。小林さんが最後まで熟考するも絞り込んだところで、進行の菅沼さんが手を求める。「まず、熊谷さんだと思おう」との声に、秋山さん、小林さん、姫野さん、光田さんの4名が手を挙げて過半数を超えた。この瞬間、菅沼さんが「グランプリは熊谷さんに決定しました」と高らかに宣言。会場から盛大な拍手が起こり、公開審査が終了した。

■出品者インタビュー

小山田邦哉

今回は長い間、自分の作品と向かい合う貴重な機会になりました。プレゼンテーションでももう少し言いたい事をストレートに言えばよかったと思います。今後も自分のスタンスで作品を撮っていくでしょうが、もっと素直になりたいですね。

小池裕也

展示の方法が課題です。誰かに見せるということを突き詰めて考え、人がどういふふうに見るかということを考えられなかったですね。そこをもっと考えていきたいです。人に見せる“やさしさ”が足りなかったのかも。

熊谷勇樹

グランプリという結果は、自分一人ではできなかったのでも助けてくれたまわりの人たちのおかげです。今回は他のファイナリストの人たちとグループ展ができてよかったと思います。一年後に向けて責任があるので、期待に応えられるよう努力していきたいですね。

齋藤圭芸

自分の中にあった課題を克服してファイナリストになりました。作品づくりのプロセスの中で何度も言葉にする機会があって、すごく勉強になりました。また今日いただいた課題をもとに、次の作品づくりを頑張りたいと思います。

鬼頭志帆

このような機会をいただいたことに感謝します。審査の過程で作品を見ていただき、さらに真剣な言葉をいただけてありがとうございます。他のファイナリストの人と一緒に展示できたことは財産。写真家の方に2票支持されたのは励みになります。

真鍋奈央

一連の作品づくりはすごく大変でしたが、気持ちよかったです。ポートフォリオに始まり、展示、プレゼンテーションまで自分のやりたい事は出来ました。これからも、もっと世界を写真で表現していきたいですね。

<文中一部敬称略 取材・文/田尻英二>

■お問い合わせ先

株式会社リクルートホールディングス ガーディアン・ガーデン
〒104-0061 東京都中央区銀座7-3-5 ヒューリック銀座7丁目ビルB1F
TEL:03-5568-8818 FAX:03-5568-0512 http://rcc.recruit.co.jp
Twitter:@guardiangarden Facebook:facebook.com/guardiangarden.tokyo

Guardian
Garden

RECRUIT